

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 1935年(昭和10年)10月1日～1936年(昭和11年)9月30日の風力計記録発見(レプソルド子午儀室床下探検)**

アーカイブ新聞第989号に「15mm幅クロノグラフ記録紙発見」、第990号に「レプソルド子午儀室床下で気圧計記録紙発見」、第991号に「1928、29年、1939年の自記寒暖計記録紙発見」という記事を書いた。これらは第988号に書いた「クロノグラフ収蔵」という記事のクロノグラフの記録テープを捜索するためにレプソルド子午儀室床下に入り込んで発見したものである。そこで表題の後ろに(レプソルド子午儀室床下探検)という言葉をおいた。ここ数日何度もレプソルド子午儀室の階下に潜り込んでいて、まさに探検の気分なのである。今回も自記記録紙で、包みに「第参巻 風力計記録 自昭和十年十月一日 至昭和十一年九月卅日」と書かれている(写真1)。1935年10月1日～1936年9月30日の1年間の風力の記録である。

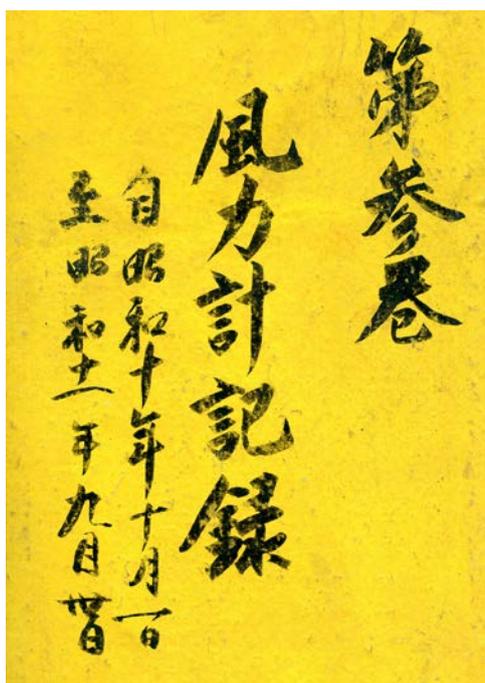


写真1 包みの表書き

風の記録では、温度、気圧などとは違って風向、風速によるベクトルで記録されなければ意味がないように思えるが、この記録は風力計とあるから、風速だけの記録なのであろうか？今回発見した記録紙には中央気象臺規格と書かれている(写真2)、またこの記録紙の読み方が分からない。記録紙の最後に凡例のような記載がある(写真3)。しかし、この記録を眺めても風速何mと読むのか全く理解できないのである。

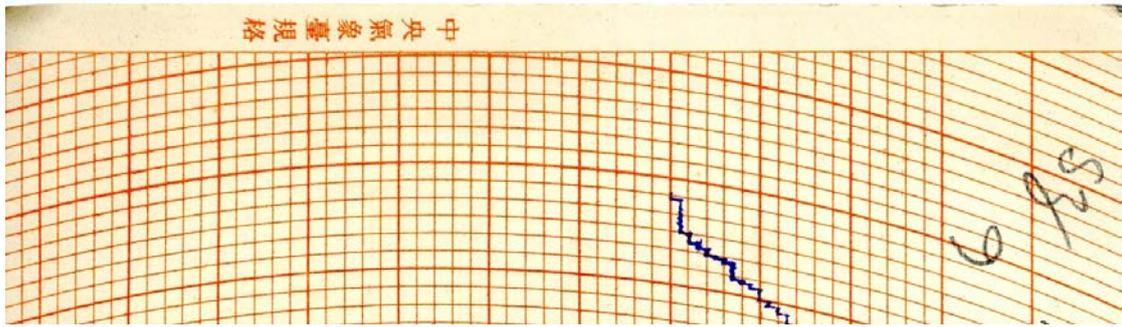


写真2 中央気象臺規格とある

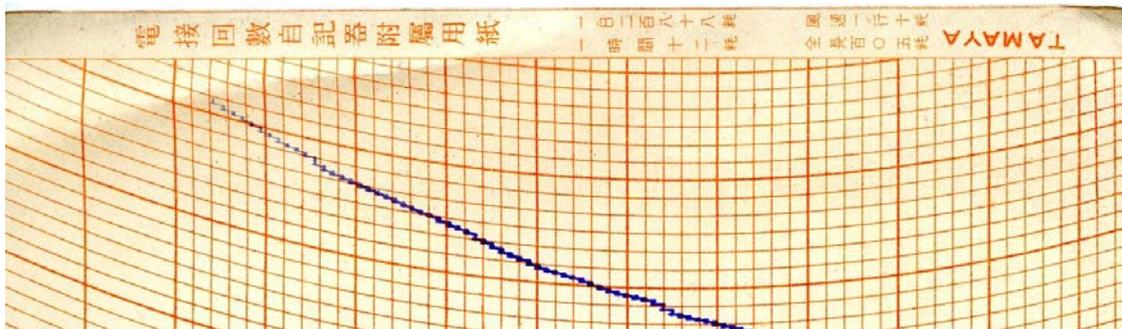


写真3 凡例のような記載がある

この記録紙は「電接回数自記器附属用紙」とあり、1時間12耗、1日288耗、全長104耗、風速1行1耗、TAMAYAと記載がある。ということは、風力計は「電接回数自記器」という機器らしいことが読める。そしてメーカーはTAMAYAのようだ。

しかし、やはり記録紙を見ても筆者には風速は読めないのである。記録紙の例を載せる。1935年10月1日（写真4）、10月2日（写真5）、10月3日（写真6）である。

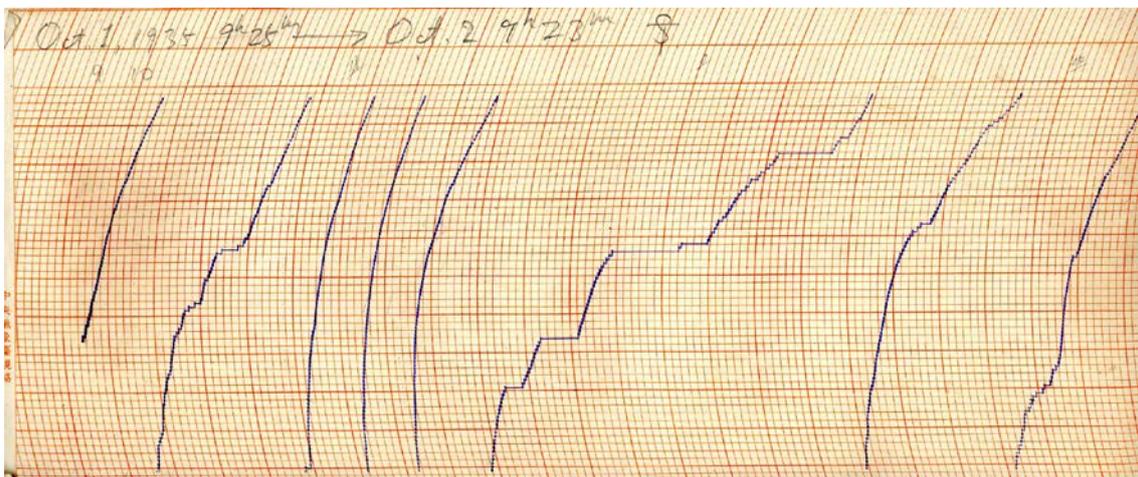


写真4 1935年10月1日の記録紙

読者の中には、この記録紙の読み方をご存知の方がおられることを期待して、ご教授をいただきたいと思います。この記録、1935年の風速を知ることが、現在の国立天文台の研究に資するところがあるならば、気象庁に出向いて調査をするなどの努力はいとわらないのであるが、そこまでやる気になれないでいる。

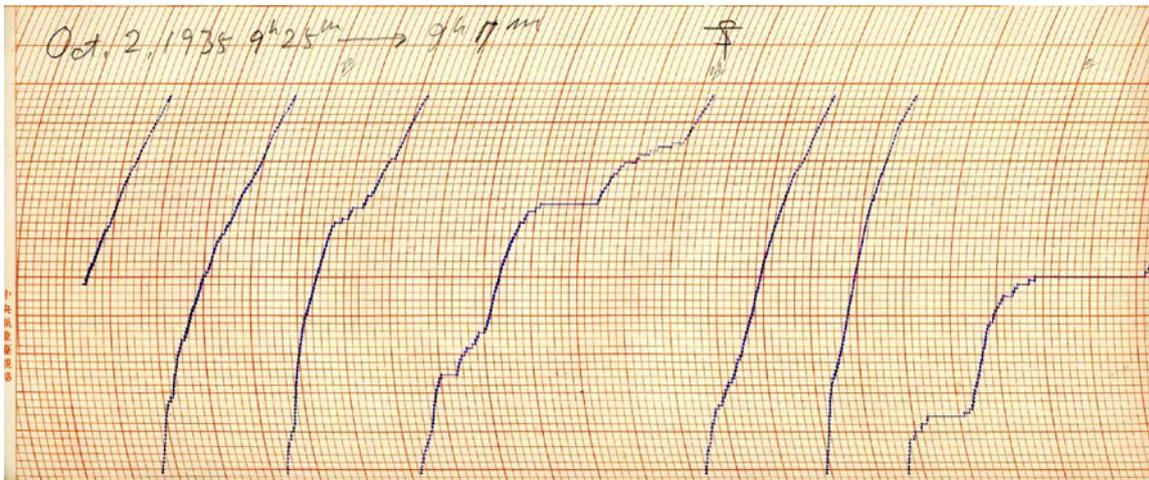


写真5 10月2日の記録紙

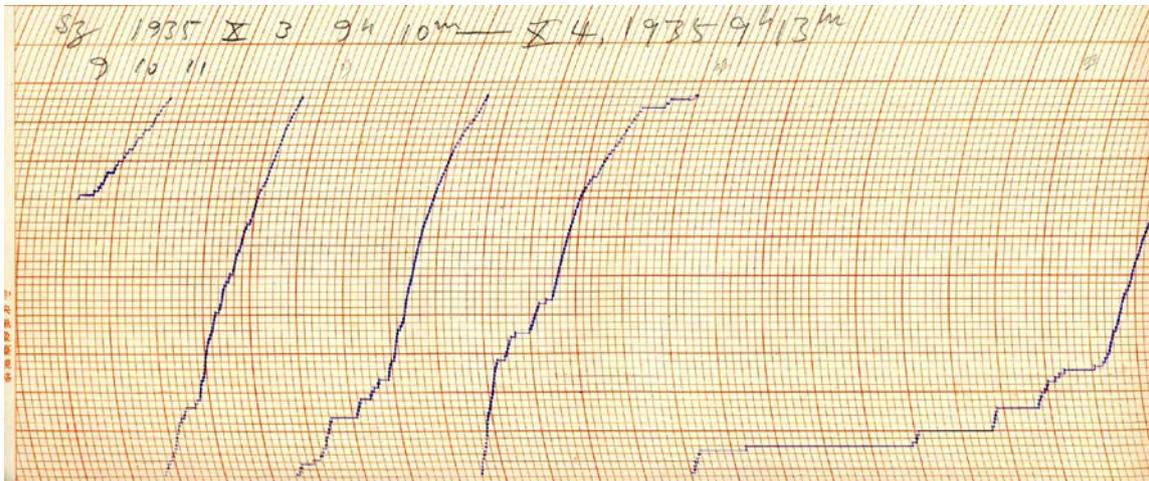


写真6 10月3日の記録紙

この記録の読み方が分かれば、それはそれで興味深いが・・・・・・・・

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp